

戦前期の浦和における宅地化の進捗とアトリエ村の形成

正会員 ○安野彰*
 会員外 渡邊愛**
 正会員 窪田美穂子***

住宅地 浦和 アトリエ村

1 はじめに

本稿は、大正末期から浦和の鹿島台付近に多くの画家が居住しはじめた事実に着目し、こうした状況が形成される前提と経過を検討するものである。

浦和はこれまで、県庁所在地・東京の郊外住宅地として発展を遂げてきた。しかし浦和の住宅地化についての具体的な研究は少なく、宅地化の詳しい過程は明らかではない¹。ここでは、当時の新聞記事、行政資料、聞き取りなどを手がかりに、アトリエ付き住宅群とそれが位置した宅地の整備や周辺の環境の変化などについて、これらの関係を考察する。そうすることで、戦前期の浦和がどのような過程を踏んで郊外住宅地として成立していったのかについて、その一端を明らかにすることを目的としている。

2 大正初期における居住地としての浦和に対する眼差し

大正5年初頭、国民新聞では、東京近郊のどの土地が理想的な郊外住宅地として相応しいのかを一般の投票により選定しようという紙上企画を催している。また、別荘地についても同様の企画がこれに続けられた²。

投票の結果、浦和町は郊外住宅地部門で選外4等(9等)、別荘地部門で8等と両部門で入賞を果たし、田園的居住地としての適性を知らしめることになった。当選後、そうした適性を具体的に紹介する記事が数回に渡って掲載されているが、これらを参照すると、東京への近さ、教育環境の良さ、下水道整備による清潔さなどが理由に挙げられている³。また、

「新緑の鹿島臺」、「武蔵の國鹿島臺に位置を占め富士の英姿を眺め其他風光明媚の箇所多し」、「浦和の人が得意がつて居る斯く高い鹿島臺から西南に見る富士山」、「浦和付近で最も有望視されて居る生活地は十万坪の鹿島臺」

など、鹿島台の地名を挙げ、この土地が高燥且つ風光明媚で災害の不安が無いことを理由にしている。鹿島台とは、県庁舎群付近から別所沼東縁にかけて広がる10万坪前後の高台を指す(図1)。これらの記事では、浦和市街=鹿島台という記述があるが、大正初頭の鹿島台は官庁や教育施設以外のほとんどが畑地であったことから、浦和では鹿島台こそ最適な住宅地、とするのが正確な記事の意図といえよう⁴。また、別所沼近辺が推挙する場合も多く、鹿島台のなかでもこの湖沼に臨む高台が注目されていることが判る。

すなわち、大正初期の浦和は、東京に近く都市基盤も整備されたうえに風光に優れており、別荘地と郊外居住地の両面において適当な土地であるとの認識を持たれていたが、一連の記事の内容を見る限り、その視線は鹿島臺に注がれていた。

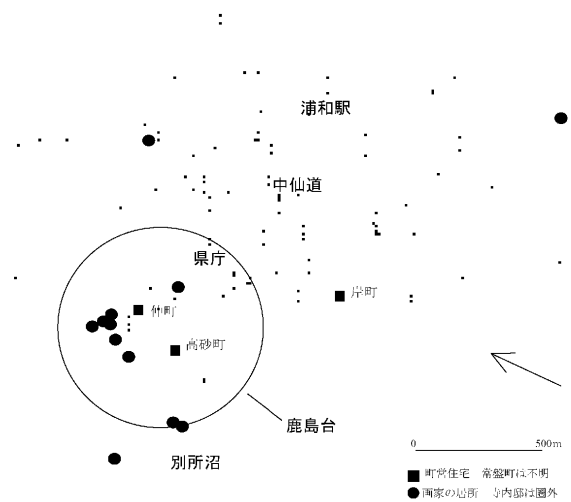


図1 昭和初期の鹿島台(町営住宅と画家の居所の位置)

3 町営住宅の建設と耕地整理事業

町営住宅の建設が浦和町議会に提案されたのは大正9年であった。大正11年6月2日に着手、同年10月にそして町内4箇所竣工した⁵。賃貸を基本としつつも、希望に応じて月賦による購入も可能としていた。当初の目的は、住宅不足とそれによる低質・高額な住宅建設の抑制で、一般に居住者を求めるものであった。しかし、状況が緩和されたことを受けて、規模を縮小しつつ、引き続き住宅不足に喘ぐ官吏・教員向けに建設することになったとある⁶。記録を見ると、実際の居住者には、官吏が最も多くそれに教員が続いている⁷。

表1 町営住宅の建設地と棟数

		一戸建	二戸建
第1号	常盤町	5	4(8戸)
第2号	仲町	6	3(6戸)
第3号	高砂町	5	4(8戸)
第4号	岸町	5	4(8戸)
合計51戸		21戸	30戸

大正11年町営住宅関係書類より作成した。町名は記録の途切れている昭和8年当時のもの。

また、昭和8年当時の地番が記録されており、それらの立地が確認できる⁸。建設された4箇所のうち2箇所は、鹿島台に建てられている(図1)。鹿島台付近は県庁や裁判所、刑務所などの建物が集まっているため、これらに通勤する人々も居住者に多く含まれたのではないかと考えられる。鹿島台付近は、そうした立地においても、住宅地として早くから着目されていたと考えられる。

町営住宅の建設と相前後して浦和耕地整理事業の組合が設立される。当時の浦和町の全域に及ぶ規模で、その後の浦和の市街化の基盤となった。当初の目的は明記されていないが、前述した郊外居住地としての浦和に対する期待や大正後期の住宅不足を見れば、宅地化の目的があったと考えるのが妥当であろう⁹。大正 11 年 9 月の工事着手後、大正 12 年から 14 年にかけての記述には、

「本地ハ東都ニ隣接シ住宅地トシテ最モ適セルヲ以テ逐年移来ル者其数ヲ増シ為ニ町ノ發展モ頓ニ盛ニナレニ此処ニ於テ本組合ハ更ニ地域ノ擴張ノ必要ヲ認メ…」¹⁰

とあるように、住宅地として整備していく目的の明示がある。

従前は畑地が多くを占めた鹿島台一帯もこの耕地整理事業の対象区域に組み込まれている。鹿島台がどの段階で整備されたかは不明であるが、昭和 2 年発行の地図、昭和 9 年撮影の航空写真などを参照すると、鹿島台地区が周囲の外縁部に比べ特に建て込んでいる様子から、早い段階で整備され、多くの住宅が建設されていったと考えられる¹¹。

4 画家の移住とアトリエ村の形成

昭和 6 年 8 月 18 日付の東京日日新聞・埼玉版では、

「浦和町鹿島台ここ文明の郊外は四十有余名のアルチストがさながら絵描き村を現出している…」¹²

と、浦和鹿島台には 40 人以上の画家が群居していたことを報じている。実際にこれだけの画家が何処に在住していたかについては不明だが、この記事に個人名で掲載されている画家を中心に、略歴調査や今も浦和に在住の画家の遺族から聞き取りをした結果、表 2 に挙げる 16 名が戦前の浦和に在住していたことを確認できた。また、図 1 に示すように、そのうちの 13 名について、居所の位置が凡そで判明している¹³。

表 3 大正期～昭和期にかけて浦和に在住していた画家

画家	S6記事	在住期間	移住理由	住宅
高田誠	○	T2～H1	浦和出身	ア住
小林真二	○	T13～S40	震災で新しい住居を探していた	ア住
武内鶴之助	○	T13～S20	震災で新しい住居を探していた	ア住
相馬其	○	T13～S19	?	ア住
跡見泰	○	T14～S28	浦和の田舎的風景に魅かれた	ア住
須田剋太	○	S2～S16	姉が浦和在住 東京美術学校受験のため	？※
奥瀬英三	○	S6～S50	浦和に住む親戚の紹介	ア住
杉全直		S8～S15	?	?
寺内萬治郎	○	S9～S39	自然が豊かである 上野に近い	ア住
林倭衛		S16～S20	?	?
福宿光雄		?～S45	?	?
山田説義	○	?	?	ア
佐藤三郎	○	?	?	ア住
近藤陽二	○	?	?	?
小林量造	○	?	?	?
里見明正		?	?	?

S6 記事列の○は、東京日日新聞が昭和 6 年に報じた一連の記事で浦和に在住画家として名前が挙がっている意。ア住…アトリエ付き戸建住宅 ア…アトリエのみ ?…不明 ※須田については借家であることがわかってい

これを見ると、画家達は鹿島台と別所沼畔に多く居住していることが判る。鹿島台では、大正 13 年に小林真二が最初に移住したのをきっかけに、佐藤三郎、跡見泰らが隣り合うように居所を構えた。奥瀬英三は先住する親戚筋に勧められて

昭和 6 年に移住してきた。別所沼畔では、須田剋太や林倭衛が画室を構え、林が別所沼を題材に描いている。

彼らがこの地に移住してきた理由は、「震災後の新居を探す」、「自然が豊かである」、「上野に近い」などであった。震災が移住のきっかけとなっていることもあり、大正 13、14 年からの居住が多い。自然の豊かさという点では、付近に別所沼等がある鹿島台の立地が適していたといえる。また、この時期に浦和に居住した多くの画家が風景画を得手としていたことも関係していると考えられる¹⁴。また、美校や美術館のある上野に出やすいということは、浦和が他の郊外居住地と差異化されるうえで重要な項目であったといえる。

なお、戦前期に建設されたアトリエ付き住宅として、故奥瀬英三氏のものが北窓と中 2 階というアトリエ建築の特徴を良く残しつつ現存していることが確認された¹⁵。

5 結論

大正 5 年において、浦和は住宅地兼別荘地として有望視され、特に別所沼を臨む鹿島台が注目されていた。大正 11 年からは町営住宅の建設が鹿島台近辺を中心に開始されると同時に耕地整理事業が進捗し、アトリエ村が形成される鹿島台もその対象として早くから開発されたと考えられた。すなわち鹿島台は、当時の浦和において、住宅地化が先進する重要な場所であった。これには、高燥な土地で風光も良く且つ官庁が近いということが関係していると考えられた。事実、画家達の移住理由としても自然が豊かであることが挙げられた。要するに、上野へのアクセスが良い浦和のうち、特に環境が恵まれ、宅地として整備されつつあった鹿島台を中心に画家達が移住し、アトリエ村ともいえる地帯が出来た。また、当時のアトリエ建築の特徴と近代浦和における宅地化の歴史を伝える貴重な遺構として奥瀬邸の現存が確認された。

最後になったが、本稿を纏めるにあたり、奥瀬澄子さん、跡見佳代さん、うらわ美術館には多大なご協力をいただいている。この場を借りて謹んで御礼申上げる。

註

- 『浦和市史』で触れているが、諸事業の関連や具体性を伴う議論は少ない。組織票があることも報じられており、選定は市民一般の意見が正確に反映されたものとは言えない。しかし、各土地の内外のいずれかからは、土地に対するその種の見解あるいは期待を抱かれていたと間違いないといえる。
- 国民新聞 大正 5 年 3 月 18、19、21 日、5 月 1、2 日の掲載記事より
- 『最近調査浦和町全圖』大正 3 年
- 浦和市総務部市史編さん室『浦和市史通史編Ⅲ』浦和市 平成 2 年 P. 386
- 浦和町長 石内保太郎「町営住宅建設計画に関する報告書」大正 14 年『町営住宅関係書類綴』さいたま市役所に所収。
- 大正 12 年度から昭和 8 年度までの「町営住宅事業報告書」による。『町営住宅関係書類綴』さいたま市役所に所収。
- 『町営住宅関係書類綴』に地番掲載。『最新浦和町案内全圖』昭和 8 年を参照。
- 埼玉県浦和耕地整理組合『事業完成記念帖』関栄之助 昭和 14 年
- 同上 P. 2
- 『浦和市街圖』昭和 2 年 9 月実測、『埼玉県写真帳』埼玉県 昭和 9 年 p. 2
- 『美術の秋の前奏 A. B. C』東京日日新聞 昭和 6 年 8 月 18、19、20 日
- 奥瀬氏、跡見氏のご遺族への聞き取りのほか、水野隆『埼玉の画家たち』さきたま出版会 平成 12 年などを参照した。居所についてはうらわ美術館のご協力を得た。
- 跡見泰「春光」、高田誠「浦和風景」などは、浦和を描いている作品。
- 奥瀬邸については別稿で述べる。

*文化女子大学
**株式会社シンケン
***箱根町教育委員会

*Bunka Womens' University
**Shinken
*** Board of Education of Hakone Town